

『所安遺集』について

要 木 純 一

「元詩の興るや、始まること遺山自りす。中統、至元而後、時は承平に際し、尽く宋、金の余習を洗う。則ち松雪之が倡と為る。延祐、天曆の間、文章は鼎のごとく盛んなり。希踪の大家は、則ち虞、楊、范、掲之が最と為す。至元改元、人材輩出す。新を標して異を領するは、則ち廉夫之が雄と為す。而して元詩の変極まれり矣」(顧嗣立『元詩選』初集辛集 楊維禎の条より)

顧嗣立の『元詩選』は、単に博搜を志すのではなく、独自の文学観を以て、元詩全体を通観せんと企図したものであるが、右の如き説明を見る時、筆者は、所謂、元四大家と楊維禎等との間に存する世代に対する顧氏の評価の低さを或いは読みとれるかと思うのである。「延祐、天曆の間」という語に、その世代が包括されるにせよ、また、歐陽玄や黄縉らの実力に言及する文が他にあるにせよ、その世代に属する文学活動に対して、小詩人の群れを見るかの如く、顧氏は冷淡である。

この世代は、元四大家と数年の年齢差しかないが、何よりも仁宗朝、延祐年間に復活せられた科挙に同世代の多くが挑み、うち幾人かが政治の中核で活躍したことによって特徴づけられる。南人出身の人材が輩出し、出生は南宋期であっても、元朝の人間という自覚が強く、一三世紀前半のしばらくの大平を前後の時期に比べればやや安逸に過した世代である。

中国史において、文学が輝きを増すのは、多く体制の草創期か崩壊期に属するのが通例であり、安定期、平和期の文学には変化が乏しく見える。そして大局的な「文学史」の見地から俯瞰すれば、変化の見にくい文学が等閑に

付されるのはやむをえない面があるが、文学の日々の営為に、未だ何を生み出すべきか解答の見えないままに暗中模索を試みる個々の文学者の挑戦―それらの多くは継承者もなく中途挫折するのであるが―に、感情移入した視点から検討すべきものが、文学研究の対象には存在するのではないか。いわゆる「文学史」の光が届かぬ闇の部分で筆者はしばらく追ってみたいのである。その際、注意したいことは、「文学史」では、表現の「模倣」や「弛緩」は意義の無いものとされるが、筆者の観点からすれば、「模倣」していても、その文学的快楽は従来作品の快楽とは必ずしも同一ではないかも知れないということであり、「弛緩」にはその由って来たるゆえんが何かあり、そのありようを探求することによって、多くは作者の極私的、瞬間的な快楽にすぎないであろうが、案外に同時代（或いは更に超時代）に通底する快楽の一表現である可能性があるということである。

今ここに、文学史的には一顧だにされない陳泰なる人の『所安遺集』を取り上げたのは、「文学史」的に名を残した同世代の欧陽玄や黄縉らに比べて、体制（政治的体制であるとともに「文学史」的体制である）に関わる部分が少ないだけに、この世代の暗黙の了解であったが、後世の人にわかりにくくなった、文学的快楽のありように迫れるのではないかと考えるからである。

陳泰がいかなる人であったか、やはり通説的なものとして、顧嗣立の『元詩選』初集、己集のその条を引こう。「泰字は志同、長沙茶陵の人。延祐の初、欧陽玄と共に郷に挙げらる。『天馬賦』を以て薦せらるるを得たり。考官評して曰く、気骨は蒼古、音節は悠然たり。天門洞開すれば、天馬は以て自ら見れる可し矣」と。龍泉の簿に官し、吟詠を以て自ら怡ぶ。別号は所安、『所安遺集』一卷有り。其の曾孫明の郷貢の進士朴の編する所なり。後に華亭の教諭章之を刻して以て世に行わる。成化中、内江令銓重刻す、而して蠹損すること半を過ぎたり。存する所の者は歌行多しと為す、亦清婉として致おもき有る也」

欧陽玄と同じく今の湖南（当時湖北と合わせて湖広）の人で、延祐元年（一三一四）の郷試、そして、翌年の大都での会試を受けた人であり、この世代の先頭を走る選手であったと言えよう。しかし、それ以降の経歴は欧陽玄

と明暗を異にする。一方は翰林の臣として死ぬまで（二三五七）体制の頂点であり続けたが、一方は後述の如く会試の不首尾により、卑官のまま終った。

『四庫全書総目提要』の『所安遺集』の項も陳泰の生涯に關しては右の記述をほぼ踏襲する。本稿の立論には、これで支障がないが、本論文で底本にする光緒六年武林節署刊本（後述）の『所安遺集』附記の種々の資料によって、彼の最期については記述を補わなければならない。その引く所の『江西通志』（江西巡撫謝日丈撰）「贛州府名宦」の条に、

「元陳泰は）龍南に尹たり。學校を修め、貧窮を賑卹し、境内又安たり。信豐の洞賊は境に臨む。泰は兵を率いて与に犁鼻山に戦う。敗績して之に死す。士民悼痛して、馬鞍山の原に収葬し、祠を立てて之を祀る」とあり、「贛州府祠廟」の条にも、

「忠節祠は龍南学の左に在り、元の尹の陳泰を祀る」

とある。『所安遺集』（25葉表）に「龍南臬阜禱於沈公石室有感」詩が収められており、龍南の尹として治政に尽したのは間違いないであろう。また、『所安遺集』附録に陳泰と同時代人の江西の人李祁『雲陽集』より「題刊陳所安文集」を引く。

「天馬驍騰して、早に声を鄂渚に蜚ばす。鸞鳳伏竄して、竟に命を殊郷に殞す」

「信豐洞賊」の詳細は分からぬが、延祐二年（一二三一五）の蔡五九の乱、延祐五年（一二三二八）の劉景周の反抗（『元史』「仁宗本紀」二、三参照）に關係することであろうか。しからは、官に就いて早く死亡したことになり、彼の詩の少なさが、遺稿の「蠹損」のみによるもので無いことを推測させる。

『所安遺集』のテキストについては、『四庫全書提要』をまず引こう。

「其（陳泰）の著作も亦た未だ集を成さず。其の曾孫朴に至りて始めて哀輯して以て此の編を成す。故に『遺集』と曰う。明の成化中其の來孫銓等重刊す。卷末に「旧と題する六字有りて、後段は蠹損す、惜しい哉」と云えば、

則ち朴の輯むる所を併せても亦た完本に非ざるなり」

今諸本に附される陳銓の『後跋』に、テキスト出版までの経緯は詳しい。今見られるのは皆このテキストの復刊または鈔本である。『元人文集珍本叢刊』（一九八五、新文豊出版公司）の『所安遺集』の潘柏澄による叙録にいう。「清四庫全書著録す。又趙之珏の星鳳閣鈔本、金侃鈔本（商務印書館「涵芬樓秘笈」収す）有り。光緒六年（一八八〇）武林節署刊本頗る精なり、末に泰の伝記資料多則を附す、他本の無き所と為る、茲に即ち拠りて以て影印す」今回、星鳳閣鈔本を除く、四庫全書文淵閣本、金侃鈔本、そしてこの武林節署刊本を見るを得た。各テキストにはそれぞれ特徴があるが、大きな違いはなく、潘氏の言のとおり武林節署刊本が校勘も施されて精密であり、伝記資料を収めて便利であるので、筆者もこれを底本に用いて他本を参照することにした。

陳泰の文学に対する、恐らく一般的であろう評価として、やはり『四庫全書提要』の所論を引く。

「今作る所の七言歌行を觀るに、十の七八に居り。大致おおよそ氣格は李白に近く、而して造句は則ち多く李賀、温庭筠に類す。或いは奔軼太だ過ぎ、剽して而して留とどまらざるを免れず、又時に粗廓すざに傷やぎ、二元（歐陽玄のこと）の風規大雅にして、典型を具有するに及ばざるを免れずと雖も、要するに其の才氣は縱横、頗る奇句多く、亦た自ら湮没す可からざる者有り。久しく晦かれて而して終に世に伝わるも、亦た由よし有り矣」

王士禎も『所安遺集』を評して（『所安遺集』附録所引「居易録」）、

「右集一卷。元の長沙の進士、陳泰志同の著。歌行馳騁して、筆力太白の風有り。元人諸名家の中に在りて、当に道園（虞集）の下、諸公の上に居るべし。名は甚だしくは著らかならず。豈に名位卑しければなり耶」

『所安遺集』附録所引の趙之珏『星鳳閣藏書後記』『所安遺集跋』によれば、

「漁洋の宋元詩に於けるや、許可すること少なし。其の推重することの此くの若きか」ということであるから、以て王士禎の陳泰に対する評価の高さを知ることが出来る。

されども筆者は、これら、陳泰の詩を元詩史における唐詩模倣の流れに位置づける論議を離れて、『提要』にも

指摘するごとく歐陽玄等の詩壇の主流から外れていった陳泰個人の事情、通常の「文学史」に収まらない、陳泰の文学が内包するある志向に着目して、考察を加えたい。

元代の文学者において、科挙における自己の答案は、後世の八股文とは違って、文学的な（それはとりもなおさず政治的、社会的な、ということになるのが、中国文明の特徴であるが）出発点として重要な意味を持っていた。

少し時代は遅れるが、至正年間の郷試に及第した元末の詩人、銭維善は、次のごときエピソードで有名だ。

「銭思復は嘗て浙江省郷試に赴く。時に浙江潮賦を出す。三千人中皆銭塘江の曲江為るを知らざるに、思復独り之を用いる。蓋し枚乗の七発に出づ。考官其の巻を得て大いに喜び、前列に置く。思復帰りて乃ち曲江草堂を構え、暮年自ら称して曲江老人と曰う」（明の都穆『南濠詩話』）

どのようなルートかつまびらかではないが、科挙における作品の出来は、知識人のネットワークの中で、大いに喧伝され、その作者の商標の如きものになるのであった。

陳泰の場合も、『所安遺集』の冒頭に収める「天馬賦」が、彼の文学の出発点となり、評価の原点となった。先に引用した、いわば陳泰に対する弔辞である、李祁の文にも、「天馬驍騰し、早に声を鄂渚に蜚ばす」とあり、「天馬」は陳泰に死ぬまでついていくのであった。

「天馬賦」については、陳泰の同郷の先輩である劉詵が陳泰に贈った「天馬歌贈炎陵陳所安」が『所安遺集』の附録に収められている。これは、劉詵の別集の『桂隱集』より引いたものであるが、今、文淵閣本『四庫全書』所収の『桂隱詩集』巻二で原詩を見ると、小字注が題の次行にあって、

「所安名は泰。甲寅『天馬賦』を以て薦を領す。下第して頗る遇わず。故に此を以て之を嘆ず」

という。筆者は、この「下第」を、劉詵自身のことと属する可能性も考えつつ（劉詵は、この後十年にわたって科挙に挑戦するが十分に成功しなかった）、やはり陳泰の大都の会試における不首尾を指すと思う。陳泰はそれゆえに卑官しか得られず、科挙落第の劉詵とは同情しあう仲だったのであろう。この『天馬歌』の最後にいう、

「吾れ聞く、天子の殿十二閑、驥駿並びに収められ、棄放せらるる無し。金根の雲罕は都門を出で、喚取すること雍容にして仙杖肅ならん」

いつかは元朝で重用されぬはずはないと、陳泰をなぐさめ、おのれもなぐさめるのである。

かく出世の上ではうまくいかなかったにせよ、文学者の出発点としては上々の成功を収め、知識人界に彼を最初に印象づけたのが、この『天馬賦』であった。『所安遺集』の冒頭を飾るにふさわしい。『所安遺集』の末の方に、例えば「戊戌元日」詩（三十四葉表）など早期の作品と思われるものが少数収められているが（戊戌は一二九八年）、それらは恐らく後人が補ったもので、筆者は、陳泰が生前に意図したのである。原「所安集」の構成は『天馬賦』を冒頭において、それ以後の作品、しかも最も得意とする七言歌行体のみをその後配列して、『天馬賦』以前の作品や、七言歌行体以外の形式の作品をできるだけ排除したものであったのではないかと考える。すなわち、『蠹損』によって作品が失われたのではなく、おのれの作品群を一種の芸術的統合体として残したかから今のような形の『所安遺集』になったと考える方が釈然とする点が多いのではないだろうか。子孫知人が編集したにしても、それは生前の陳泰の文学的志向を充分に活かす形で成されたにちがいない。

別のジャンルではあっても、賦と七言歌行体は共通する点が多い。長短句がまじり、換韻がしばしば行われ、論理性よりも感情に訴えることに重点がある。高らかに朗誦してこそ、その快楽は最大限に發揮される。陳泰は二つのジャンルに通底するものを明らかに感じとっているのであり、賦一作品の後に、七言歌行体が並ぶ構成は、不思議ではない。

陳泰の文学的人生を決定づけたといつてよい『天馬賦』を以下段を追って分析していくことにしよう。

まず、題の後に付された「考試官批」について。『元詩選』や『四庫全書提要』が恐らくは、陳泰の気骨を強調せんがために、意図的に引用しなかった部分がある。すなわち

「疑うらくは楚辞に熟する者か。然れども悲嘆を免れず。意うに疑うらくは必ず山林淹滞の士か」

のくだりである。そこに見えるのは、純粹な賞讃ではなく、彼の作品に答案を前にしたとまどいである。『天馬賦』という試験題がなげ出されたか。日に千里を走る才能を持つ馬でも、名調教師たる伯樂に出会わねば、驚馬のままに終つてしまふ。もちろん、韓愈の「雜説」を有名な例として、これが君臣關係の比喩であることは容易に見てとれる。そして、有り難くも元朝が科擧を実施したのだから、知識人たる者、積極的に自らをとりたててくれる皇帝をことほがなくてはならない、それが常道である。ところが、陳泰は、楚辭の伝統にしたがって、君主にとりたてられぬ悲哀の面を歌いすぎる。進んで新王朝に仕官の場を見つるべきなのに、山林にとどまる隱者のようである。そこで考試官はややしなめる口調で「天門洞開すれば、天馬以て自ら見る可し矣」と続けるのである。『元詩選』等の不十分な引用のしかたは、読者をまどわせると思う。筆者は、ここに陳泰の体制に反逆するわけではなく、かといつて、完全には体制に順応できずある程度の隔膜をおいてしまう性格を読みとる。歐陽玄の『圭齋文集』も、同じ科擧試験の解答であろう「天馬賦」を冒頭に掲げ、彼の文学者としてのデビュー作であつたろうことを印象づける。その筆致は、陳泰のとかなり趣きを異にする。確かに才能を見出されない天馬の悲哀を詠みはする。しかし、その後に「客」に難ぜさせて、やがて馬の力が發揮されるであらうことを高らかに宣言する。

「庶幾わくは、之を玄黃の外に求むれば、則ち亦た駿骨の市る可き也」

このあたりのパーソナリティーのちがいが、一方を体制の頂点に立たしめ、一方をまさに驚馬に交わる天馬の如く地をはいずり回らせることになつたのではないか。

また、ここで注意したいのは、天馬については、李白をはじめ過去多量の作品が存在するが、そして陳泰も歐陽玄もことばの上ではそれらを典故として用いるが、表現が同じでもそこに凝められる実感は、過去と違ふものであるうということだ。モンゴルのユーラシア大陸制覇によつて、「天馬」は、もはや空想上の産物ではなくなつて、実際に西域より移入せられたであろう。元朝の征服という新たな状況を生々しく印象づけるものであつたにちがいない。時期も状況もちがうが、歐陽玄が至正二年、拂郎国から贈られた「天馬」について頌を記している（『圭齋文集』卷一）のも参考にならう。

さて、本文第一段。

「龍有るが若し兮、渥注の子、栄河の孫。(批、便ち奇崛)産すること月窟自りし、大宛より來たる。筋権奇にして而して虎脊なり兮、肉磊砢にして峰巒なり。精神變化して測る可からず兮、上屋房の垣を貫く。朝に蹠を河洛に発し兮、晡に影を崑崙に没す。銜勒有りと雖も、顧みるに暇あらず兮、彼の輿隸は其れ馬んぞ能く援かん。(批、筆氣飄飄たり)」

はじめはごくすなおに天馬の才を賞讃する。「権奇」の語の使用など、李白の「天馬歌」等前代の作品をそのまま模倣した部分が多いが、筆者はここで「便奇崛」の批語にこだわりたい。批者が、陳泰に対して必ずしも賞讃ではなく、とまどいに似た反発の気持を持っていたかどうかは先述したが、この場合も賞讃一方ではなく、何かのとまどいを感じているようである。それは何に對してか。筆者はその内容に對してよりも、その形式(○○○兮、○○之○、○○之○と、後半が對句になっている)の異様さに對してだと考えている。歐陽玄の「天馬賦」の冒頭は、「鬚房星之委精、鍾天馬之権奇」とオーソドックスな形である。内容というよりも、形式の新奇さが読者に不安感を与えるのである。決して前代の模倣に終始しない。

次の段。

「昔時の孔だ阨なるに遭ひ兮、早樞に伏して而して中頽す。鶯胎に隨いて而して並びに駕し兮、又或いは驕逞して而して相い欺く。芻藪を啖いて而して飽かず兮、羞豆菽の期す可けんや。塩車に軛せられて而して太行に登り兮、路は岩壘として其れ險崎たり。羲和迫りて而して將に晏れんとし兮、勢蒼黄として而して摧萎す。(批、之を讀めば悵然たり)翩翻たる伯樂は兮、道安くに適きてか之に逢う。泫然として子が為に涕し兮、爾は何ぞ此の歎に困ずる。(批、奇氣掬す可し)世は貴賤を之分たず兮、信に馬ぞ夫の駿を用て為さんや。劍佩を解きて以て質と為し兮、吾將に子を待ちて而して西のかた帰らんとす。夫の大漠の野を掃空して兮、寧ろ玄圃を轆して而して崦嵫に騰らん。然らずんば雲に乗りて風を躡み周穆を載せて而して遠覽し兮、王母に瑤池に造らん。是に於いて天馬は、首を俯け沫を噴き、鬣を振りて仰ぎ吁く。物は固より各の遇する所有り兮、遇は固より各の時有り。向に子の超越微かりせ

ば兮、骨は委絶せらるるも其れ誰か知らん。(批、有司伯樂に非ずと雖も、能く子が為に刮目せざらん邪) 縦い逸氣の凌厲たるも兮、独り子が為に徘徊せざらんや。儻し一たび試みられて而して遽かに舍てらるるも兮、鼓車に駕して何ぞ悲しまん」

くどいまでに、天馬の不遇を歌い続ける。武林節署本『所安遺集』の小字注によると、

「按ずるに「勢は蒼黄として而して推萎たり」の句は『湖広通志』に「汁を漉して地に灑きて淋離たり」に作る。下に「豈に余の材の万里に足らざるか兮、顧うに雲を籜みて之安くにか施さん。將た賦命の逢わざるか兮、或いは識者の云に稀なるか。惟れ孫陽の烟鑿なる兮、銅式を神思に蘊む。驪黄已に独り解くに冥く兮、駑驥疇ぞ其の睚眦を通れん。爰に掩抑して予が為に涕す兮、爾何ぞ此の歎に困ずる」と云い、下「世は貴賤を之分かたず」の句に接す。計五韻凡そ十句。此の本は僅かに四句。計六句少し。用意相似ると雖も繁簡同じからず」

思うにこの『湖広通志』所引の文の方が、陳泰の答案の原文で『所安遺集』のものは、あまりの不遇の描写のくどさに、後に削ったものではないか。表現としても、例えば「豈余材之不足於万里兮」は一句の字数が多すぎる—それは慨嘆の氣持をより強く表そうとしたテクニクと思われるが—のを嫌ったのであろう。

批語の「読之悵然」も、先と同様、表現のうまさをとたえたのではなく、その不遇のあまりの強調に異常を感じたととれるし、「奇語可掬」は直接的には直前の「爾何困乎此歎」という見慣れぬ表現に対したものであるが、ここまでの十句以上に及ぶ、くどさそのものを目的としたかのような表現のたたみかけに対する驚きが底にあったのではないか。

かくして、この不遇な天馬が伯樂に見出され、感謝するのだが、その感謝のし方にはおのれをあまりにいやしむような、率直でない消極的な面がある。「一度ためされれば、その後捨てられて鼓車を引くような境遇に陥っても悲しくありません」お目をかけて頂いただけで有難い。が、それ以上の抱負を語ることなく、唐突に打ち切られたような感じを受ける。

この退嬰的な、自己卑下的な雰囲気から試験官は反発を感じたのだろう。「有司伯樂に非ずと雖も、能く子が為に

刮目せざらん邪」そう悲観一方に考えることはないとなしなめるのである。

最後の段はあつ氣ない。

「伯樂復た嘆じて之が為に歌いて曰く、天馬なり兮、風驟、竹耳を批そぎて兮、鏡瞳を夾む。少くして自ら見われず兮、老いて愈よ工みなり。嗟哉躑躅たり兮、吾爾の龍為るを知る」

伯樂が、ごく短いことばで、天馬にその才能を認めていることを告げて終るのである。同等に比較することは問題があるかも知れないが、歐陽玄の「天馬賦」では、「客或難之曰」と転ぜられてからの客のことばは、優に十行以上に及び、縷々として、今が天馬の用いられるべき時であることを説く。対して、陳泰の、「天馬賦」のこの打切られたような表現は、余韻というよりも落ちつかない不安感を与える。これこそ彼の本領であったと思う。それは歐陽玄の如く、文学的政治的体制の中心に座するには適さない性格であり、缺陷として従来無視されてきたものであった。しかし、筆者の観点にとつては、それは独自の存在価値を有するのである。この「天馬賦」は、まことに「文は人なり」の感を強くする、陳泰の文学的社会的出発点といえよう。

「天馬賦」全体について、指摘すべき重大な異常が今一つある。それは脚韻に関してである。今段ごとに韻字を列挙する、

第一段 孫、宛、顛、垣、崙、援

第二段 頽、欺、期、崎、菱、之、欹、為、埽、嶷、池、時、知、徊、悲

第三段 驟、瞳、工、龍。

全て、平声韻で押韻しているのである。普通辞賦は、平声韻の次は仄声韻というようにして、単調な脚韻の連続を嫌うはずである。歐陽玄の「天馬賦」もそのようになっていて、それなのに敢えて平声韻だけの賦を作った真意は何か。確かに、近体詩を作る上で、読書人はまず平水韻の平声韻の字を覚え、仄声韻の暗記をあとまわしにしたであろうから、考試官にけちをつけられないために防衛的に平声韻を用いたことも考えられるが、それでは、そんなまにあわせの「天馬賦」が知識人界の話題になったとは思えない。深い理由があるはずである。いずれにせよ、

この「天馬賦」が、考試官そして我々読者に異常な印象を与える根底には、この押韻形式があるのではないかと筆者は考える。

また、「天馬賦」全体を眺めて感ずることは、いみじくも考試官が漏した「楚辭に熟」した雰囲気である。まさに、陳泰の出身の湖広は、いにしえの「楚」の領域であり、「楚辭」はその地の伝統的歌謡といえる。「賦」であるべきなのに、敢えて「辭」の雰囲気を持つ作品を仕立てた陳泰の心理はいかなるものであったのか。

以上「天馬賦」を分析することによって得られた知見によって、陳泰の他の作品——主に七言歌行体に関して論じてみよう。

まず、最もわかりやすい脚韻のありようを調べてみよう。すると、入声の p, t, k の韻の通押がしばしば見られるのである。

「題趙子昂画馬歌」(韻字例) 墨、骨。

「黄石歌」石、入、兀、息、蜜。

「引龍珠歌」骨、集、没、脈。

「桃花硯歌」足、玉、熱、色、折。

「奇石歌」壁、疾、蠟、宅。

「泰和趙秋巘閨七夕樂章」赤、日。

「嗟哉行、和周卓翁韻」骨、活、窄。

「題劉光朝小景図」急、力。

「贈譚海陽祈雨有感」集、尺。

「周谿南諸公游龍湖、時余以病不偕、和谿南韻」月、得。

「贊皇平山王万戸」術、尺。

七言歌行体の冒頭の句や換韻第一句の末字は、押韻しているものと見なした。李賀の詩などに押韻せぬ例がないわけではないが、陳泰の歌行体では入声以外の平、上、去声韻はおおむねこの原則を守っているので、入声もそうであると考えるのが妥当だからである。また n と ng の通押と思われるものもある。

「為秋堂題錢舜举所画呉興山水图」神、青。

これらの通押の多くは、陳泰の方言のありように関わっているのであろう。すなわち、p、t、k の入声韻尾が 2 喉門閉鎖音になっている方言や、鼻母音化等によって n、ng の区別がなくなった方言の中で、人と為ったことによると考えられる。

だが、ことは、方言に惑わされて、切韻（平水韻）体系どおりの脚韻をし損ったと説明できるような簡単さではないであろう。次韻（和韻）の詩も含まれているので、陳泰の地方一般に、共通規範意識の成立する作法と考えられるからだ。更に一步すすめていえば、伝統（平水韻）を十分知っていながら、わざとおのれの地域の独自性を主張せんがために行っている可能性があるのである。

ひるがえって「天馬賦」で平声韻ばかりを用いているのは、この態度と一見相矛盾するかのようである。なぜなら地域の独自性を主張するならば、この伝統からはずれた入声韻通押を用いればよいはずではないか。しかし、仔細に考えれば、根底に同じ態度が存することに気づく。すなわち、いやしくも科挙である以上は、伝統からはずれた通押を用いるわけにはいかない。しかし、厳密に伝統的な入声韻を守るのは、彼等の言語感覚に対して何か実感が伴わない、しっくりこないものである。そこでそれらを用いない平声韻を、或いは意識的に、或いは無意識的に連続して用いてしまった作品がこの「天馬賦」であり、その異常さのよって来たるゆえんが感得できるので、地域の知識人社会で話題となったのではないか。このような仮説を立てると、筆者は少しく釈然とするのである。

このような伝統的作法では、表現し得ない、はみ出してしまいう新たな感情、快楽のあり方の受け皿として、従来詞曲或いは雜劇などの俗文学のみが論じられることが多かった。しかし、軽蔑するゆえに、或いは不慣れなゆえに、それら俗文学に表現のはけ口を見出せない、南方の知識人は、かわりに古い革ぶくろに新しい酒をもるように、辞

賦、歌行体等の伝統的文学の形式を微妙に変えて表現手段とした——このような観点が欠けていたのではないだろうか。

陳泰のこれら入声通押の特異な詩の殆んどを顧嗣立の『元詩選』は採らない。『元詩選』の凡例にいう。

「歌は以て言を永くす、韻無かる能わず。十五国の風を陳ぶるに、而も其の音甚しくは相遠からざる者は、此れ以て一定の韻有るを知る可き也。一変に迫びて永明の声律と為り、再變して隋唐の功令と為り、三變して宋人の通転と為る、而して古を去ること遠し矣。元人の韻を用いること頗る淆譌有り、而して入声尤も甚し。或いは、北方の土語を以て古音を混入し、或いは閩越方言を以て謬りて通用と称す。詩は即い甚だ工みなるも、暇類免れず、茲に特に太甚なるを去り、以て審音の意を存すと云う」

伝統的音韻体系から外れたものは採らない。ここに『元詩選』の長所と短所がある。長所は、元代における唐詩復興の流れがより明確にあとづけられるようになったこと。短所は、それ以外の要素が、読者の目に入りにくくなつたことである。国風の音韻体系が統一されていたとしても、それは成員のわずかな範囲に限られたことであつて、その数万倍の規模を持つ元代中国全体を同様にするのは無理がある。現実はずっと猥雑で、不統一で、暗中摸索の中で、多くは途中で消えてしまふ、新たな種々の志向に満ち満ちている。これは音韻だけに限つたことではないであらう。

陳泰も、文学史的な大局観では気づかれにくい形で新たな試みに挑んでいる。筆者はこのことを特に強調したい。

右に見た陳泰の方言に対するこだわり、それは「天馬賦」について最後にふれたように自らの出生の地である「湖広」いにしへの「楚」の地へのこだわりにつながっていく。

「天馬賦」を考試官の意にさからつて「楚辭」風に仕立てたように、損を招いても御国柄を主張するかたくななところがこの人にはある。「留別歐陽元(玄)魯伯昭二同年」詩では、二人を同郷の大人物だとたたえ、その末尾に「我が身も亦た大國の楚に生ず、尊前歌を作し能く楚舞す。屈原、賈誼今已んぬるかな矣、世間の人才吁あ数う

可けんや」

楚の人間である誇り、そして楚の人材の少ないことを切齒扼腕する。しかし、それは彼の世代、地方の多くと同様、反元朝の気持にまでたかぶることはない。次の詩はそうなる一步手前と考える人もいるかもしれない。「擬范增碎玉斗歌」で、范増になりかわって項羽の策のなさを嘆いた後にいう。

「嗚呼爾は漢の佐為り兮忠臣為り、千秋万歳兮爾楚に人無し」

これとて楚のふがいなさをなげくに主点があるのであって、元朝を暗示するであろう漢に対する反抗心を歌わない。「擬虞美人歌」は今すこしきわどい。冒頭、虞美人は項羽に対していう。

「王は漢の力に倍し、王は漢の時に輸す」

そして、末尾は、

「楚は猶お競い兮、天は回風す。王は騅に乗り兮去きて龍と為れ。妾は骨を帰さん兮江東に」

いかにも、南宋が元に滅ぼされたことに対する感懐が裏にある詩であろうが、これも反元朝というよりも、楚がふるいたつことを期待するに重点があると思う。むしろこのような詩を作することを許した、元代のある種の自由さこそをここでは見るべきだと筆者は考える。

彼の楚に対するこだわりは、元朝に対する反発心よりも（それがあれば科挙を受けるはずがない）、北方に対する異和感をバネにして生れているようだ。それは、会試の失敗による失意から発する部分もあるだろうが、もっと生理的な異和感というべきものである。「朔方歌」は、冒頭より、

「朔方の大野何ぞ寥たる哉、悲風惨淡として天徙り来たる。初め巨壑の如く陰浪吼え、忽ち晴空怒雷めく行るに似たり。敵風は霜を吹き石は為に裂け、漸瀝たる飛砂は人の骨を砒す」

荒涼たる風景を以て始まる。そこに陳泰は一人旅をする。

「万里の書生二十余り、匹馬もて来りて朔方の客と為る」

そして北方の人々の荒々しさについてついでついでにゆけないものを感じる。

「朔方の人胆は斗の如し、才華を闘わせず身手を闘わす。復たと悲歌慷慨の声無し、猶お能く氣を置いて雜狗を屠る」

むくわれない北方の兵士に出会ってともに涙をすすす。

「朔方の猛士氣は雲を凌ぐも、白首まで辺を防ぎて未だ策勲せられず。馬上相い逢って涙瀉ぐが如し。嗟あ、我何をか為ん朔方の野に」

末の句で、何ともいえぬ、北方に対するたえがたい感情が訴えられている。

また「邯鄲道上書所見」詩

「馬は瓏瓏、車は碌碌、古道は茫茫沙は撲撲。帽は翻翻、袖は速速、丁丁零零西番の経、軋軋刺刺單于の曲。西番の経、人の聴く無し、單于馬上琵琶の声」

西域僧の聞きとれないお経、異様な音楽。異国的な環境にあって、神經がまいってしまいそうな状況を描いている。

このような異和感というべきものにつきうごかされて、南人と北人のちがいは常に彼の念頭にあったようだ。

『梅南歌』にいう。

「去年春に隨いて江北を過ぎる、十里春風杏花白し。北人梅花を種うるに慣れず、失笑す南人惟だ雪を見るのみと」しかし、それで南人ナシヨナリズムなり、楚ナシヨナリズムなりに凝りかたまつたかというところ、そうではない。

「三月望日、攸輿楚昭王廟にて樂舞を觀る。「落花遊絲白日靜」を以て韻を分つ。靜字を得。祠は楚昭王聖帝と稱す」の詩にいう。

「吁嗟久しき暴今方に定まり、同姓の秦、徐衰盛を異にす。君看よ半屈復た何か存せん、猶お遺民有りて昭聖を奉ず」

「楚は亡びたのにまだ遺民が居て……」といういじわるな口調。そして末尾は、

「我聞く神靈は本正直、恐らくは憑依有らば觀聽を駭かさん。春秋未だ許さず王章を僭するを、尸祝寧ぞ心に天柄

を窃むべけん」

楚の人々の象徴になるような昭王廟に対して、オカルト的なものを否定して冷淡である。地方官として、早魃に際して、雨を降らす祈禱師に対しては、十分感謝の意をあらわし、オカルト的なものを称揚する同一人物がである。「飛電引。簡を魯樵雲に寄す。祈雨感有り」「譚海陽に贈る。祈雨感有り」「龍南県旱す。沈公石室に禱るに感有り」ナシヨナリズムのアクをもちながらも一方にそのナシヨナリズムを冷淡につきはなす態度は、楚の地の属した旧南宋にゆかりのある遺物を詠む詩においても感じられる。

「趙子昂の画馬に題する歌」では、確かに、南宋の皇室趙子昂の絵の馬のすばらしさは賞讃する。しかし、趙子昂の人と為りに対しては、末尾に二句だけ、「今の画する者は趙翰林、嗚呼三晋の賢子孫」といって、唐突に打ち切る。異様に冷淡で、つきはなされたような印象をうける。

「猶溪諸公と偕に、同に青原山に遊び七祖塔に謁す。步韻」は、龍南県の近くの青原山に出かけた時の詩である。七祖塔の近くには、信国公文山すなわち文天祥の詩碑があった旨の序がある。しかし、その詩には、文天祥について何も詠まない。ただ、

「碑を看れば忽ち悟る曹溪の旨、人間に向りて万縁を息めんと凝す」

文天祥の詩碑を見て、愛国の念がおこるのではなく、遁世、出家の志が生じるというのである。ごく最近の過去も、彼にとつては遠い存在でしかない。愛郷意識をもちながら、どこか冷めている。そのような人として、筆者は陳泰を位置づけたい。

実感に裏打されない愛郷意識は揺れ動きやすく、こわれやすい。かかる人々は、やがて愛郷意識を越えた万物一体、無差別の境地に、よきにつけあしきにつけ、容易に至りやすい。筆者は、その一歩手前まで来た人間として、陳泰をとらえている。

「万里行」は冒頭に次のようにいう。

「恨むらくは身の北方に生まるるに及ばざるを、門を出でて万里糧を贏ちうる無し」

飢餓を詠む場合も、常に北方との対比をし、北方を意識せざるを得ない。だが、この詩の末尾で、美人に代弁させていう、

「蛾媚我が為に歌う、世事何ぞ必ずしも愁えん。東辺に日は出で西辺に没す、南北に生まれし人も俱に白頭」

結局は南に生まれようが、北に生まれようが、同じだということになる。晩年に到れば到る程、諦観とともに万物一体の境地を詠む詩が多くなるようである。「客に予に語るに衛生の術を以てする者有り。其の説、固に流る。此を賦して以て之を解く」詩にいう。

「宇宙は真に逆旅、形骸は贅疣に同じ。古人至藁有り、変滅は憂うる所に非ず。長生本方無し、徒らに智力を以て求む。終時物化を受く、莽莽として蝶と周となり。周無く復た蝶無し、靈運は千年の儔」

荘子ばりの哲学に自分の生き方を見出していく。晩年の詩は北に対する異和感もうすれ、思いは広く元朝の版図全体に飛んでいくものが多いようである。かつて、「天馬賦」を作った時のように。

ここで、陳泰の関心は、全世界の中で特に江南地域に向かうようだ。「雲朋歌」(蒙古字学汪掾は婺州の人、其の室に扁して雲朋と曰う。將に江東に帰らんとす。詩の別れを為すを索む、因りて雲朋歌を賦して以て之に饒けす)や、「錢唐琴士汪水雲に送る」のように江南人士との交流が深い。実際に、元朝統治下のもと江南の人間の流入が多かったろうし、陳泰の方の関心も並々ならぬものがあつた。

「秋巘杭筆の恵みに謝す」詩に云う、

「懷中より出だして使君の句を贈る、岳麓の秀氣西湖に連なる。西湖の製筆天下に無し、我適すまやかに至らんと欲するに道路過なり」

杭州の筆を前にして、思いははるか西湖にまで飛んでゆく。江南がこれ以後の中国で文化の中心になるのはまぢがいなく、その流れの中へ自分を一体化させたいという彼の欲望を、筆者は感じる。「偶成」はそんな彼が見た一場の夢、

「足を濯ぐ黄河の水、髪を濯ぐ済陽の波。清き者は去りて回らず、濯ぐ者は其れ奈何せん。碧漢は銀漢より落ち、

九天に瑤境は分あきらかなり。五湖に宮袍を載せて去ゆかず、笑煞あきす江東日暮の雲」

巨人になったかのように世界を闊歩する夢。後の楊維禎の樂府を思わせるような怪しいイメージ。しかし、文明の中心地江東から離れている以上、夢は夢のままに消え、その独特の表現への挑戦は、「文学史」の枠の中では、見直されることはなかった。

伝統的な士大夫の詩文の「文学史」からは排除され、かといって庶民文学史、俗文学史の中に自己の場所を見出せない、そのようなこれら元朝の小詩人達の文学を語る観点を筆者はこれからも探求したいと考えている。